

第二百二十七話 米国第一主義（モンロー主義・孤立主義）と大東亜戦争

米国は、米国第一主義に回帰しているように見える。第二次世界大戦特に日米開戦前の米国第一主義かそれとも欧州戦線への参戦かで、政権首脳と国民の意識に大きな懸隔があった。米国民の米国第一主義への拘りは我々の理解を遥かに超えている感じがする。メモランダム 125 話で指摘したのだが、米国の孤立主義を逆手に取れば、日米避戦も有り得たかも知れない。そのような問題意識を持っている中で、当時の米国民の孤立主義（欧州戦争非干渉）と欧州戦参加を目論む政権との確執を説明した好個の書籍を読んだ。それに依拠しつつ、若干の説明をしたい。

日米戦の避戦の道があり得たのだろうか？

1 モンロー主義(1823)、第一次大戦参戦(1914)、そしてモンロー主義への回帰

米国は、モンロー主義（米欧両大陸間の相互不干渉）を外交の国是としていたが、ウィルソン大統領は、民主主義国家対専制主義国家の戦いであるとして、若者を欧州戦場に送った。ベルサイユ体制による、「偽りの安定」が次々と崩壊する状況に米国民は、二度と欧州の戦いに若者を送らないと固く決心した。ロンドンがナチスの爆撃を受けてもその決心は変わらなかった。世論の 80%以上が非介入を支持していた。



2 F・D・ルーズベルト（FDR）の三選公約と当選

「大統領は二期八年」とする不文律を破っての 1940 年の三選を目指した大統領選挙では、本音は別として、欧州の戦いには介入しないと公約して当選(1940/11/5)した。

3 アメリカ第一主義委員会の創設(1940年9月)と運動

FDRの好戦的外交に危惧を抱いたエール大学の大学生が組織した「アメリカ第一主義委員会」は超党派の全国組織(450支部、会員80万人)となった。講演会は、常に万人を超える聴衆で熱気を帯びたとされる。当時英雄と持て囃されたリンドバーグをはじめとする著名人も参加し、マスコミからも賛同を得た。因みに、第一員会は、所謂観念的平和主義団体ではなく、「自国が攻撃されない限り」戦う必要はないとする愛国者団体であった。

4 FDRによる第一員会非難等

英仏に必ず参戦すると約束していたFDRは、第一委員会の活動を目の当たりにして身動きが取れなくなったが、引き続き、干渉主義的外交を続け、ナチスドイツを刺激し続けた。また、反第一委員会の活動も活発となった。「リンドバーグはナチス」キャンペーンが行われ、「反ユダヤ主義者」とのレッテルも貼られた。フーバー元大統領著の「裏切られた自由」にFDRが如何に国民の恐怖を煽ったかが詳述されていると云う。

英国の工作組織とともに、あらゆる手段を尽くしたけれども、国民の「参戦反対」の意思を変えることは出来なかったという。

5 FDRの深謀遠慮

第一委員会の主張は、欧州戦への非介入であり、『**自国が攻撃されない限り戦う要はない**』というものである。第一委員会はアジアには無関心であることに気付いたFDRは、日本を挑発すれば介入の口実が得られると思いついたのではないか。日本挑発の種々は、メモランダム 123 話「宣戦はしないが戦争はする」を参照して欲しい。

6 日本の真珠湾奇襲(1941/12/8)と第一委員会の運動の消滅

日本の真珠湾奇襲攻撃により、第一委員会の活動は急速に萎み消滅した。

7 FDRは、日本が如何に譲歩しようと妥協する気は毛頭なかった。日本の真珠湾奇襲は彼にとっては望むところだったのだろうし、日本は何と愚かな攻撃をしたのだろうと悔やまれる。

(了)